



万葉日本画の 世界展-古のころを描く

2022年9月30日（金）～11月27日（日）

[主催] パラミタミュージアム

[後援] 中日新聞社、朝日新聞社、読売新聞社

NHK津放送局、三重テレビ放送

[監修] 奈良県立万葉文化館

[企画協力] 青幻舎プロモーション

※会場の都合により作品の一部に変更がある場合があります
※一部、季節が特定できない作品は季節欄が？となっております

番号	作者	作品	作品よみ	サイズ	制作年	季節
	モチーフとなった万葉歌					
第1章 【春・夏】						
01	荒井孝	春日の野辺に	かすがののへに	95.0×143.0	1996年	春
	見渡せば 春日(かすが)の野辺(のへ)に霞(かすみ)立ち 咲きにほへるは 桜花かも 【作者未詳 巻十・一八七二】					
02	坪内滄明	奈良春霞	ならはるがすみ	80.3×116.7	1997年	春
	あをによし 寧楽(なら)の京師(みやこ)は 咲く花の 薫(にほ)ふがごとく 今盛りなり 【小野老(おののゆ) 巻三・三二八】					
03	村上裕二	瀬	せ	110.0×122.0	1999年	春
	よき人の よしとよく見て よしと言ひし 吉野よく見よ よき人よく見つ 【天武天皇(てんむてんのう) 巻一・二七】					
04	梅原幸雄	宵の灯	よいのともしび	130.3×89.4	1999年	春夏
	夕闇(ゆふやみ)は 路(みち)たづたづし 月待ちて いませわが背子(せこ) その間(ま)にも見む 【豊前国娘子(とよのみちのくにのおとめ) 巻四・七〇九】					
05	大矢十四彦	野遊	のあそび	193.9×130.3	1997年	春
	ももしきの 大宮人(おほみやびと)は 暇(いとま)あれや 梅を挿頭(かざ)して ここに集(つど)へる 【作者未詳 巻十・一八八三】					
06	関口正男	安見児	やすみこ	142.0×90.0	1997年	春
	われはもや 安見児(やすみこ)得(え)たり 皆人の 得難(えかて)にすといふ 安見児得たり 【藤原鎌足(ふじわらのかまたり) 巻二・九五】					
07	青山亘幹	刻	とき	171.3×290.8	1996年	?
	世間(よのなか)の 術(すべ)なきものは 年月は 流るる如し 取り続(つつ)き 追ひ来(く)るものは 百種(ももくさ)に 迫(せ)め寄り来(きた)る 少女(をとめ)らが 少女(をとめ)さびすと 唐玉(からたま)を手本(たもと)に纏(ま)かし 同輩児(よちこ)らと 手携(てたづさは)りて 遊びけむ 時の盛りを 留(とど)みかね 過(すぐ)し遣(や)りつれ 蜷(みな)の腸(わた) か黒(ぐろ)き髪(かみ)に 何時(いつ)の間(ま)か 霜(しも)の降りけむ 紅(くれなゐ)の 面(おもて)の上に 何処(いづく)ゆか 皺(しわ)が来(きた)りし 大夫(ますらを)の 男子(をとこ)さびすと 剣太刀(つるぎたち) 腰(こし)に取り佩(は)き 獵弓(さつゆみ)を手(た)握(にぎ)り持ちて 赤駒(せきこま)に 倭文鞍(しつくら)うち置き はひ乗りて 遊びあるきし 世間(よのなか)や 常(つね)にありける 少女(をとめ)らが さ寝(ね)す板戸(いたど)を 押し開(ひら)き い連(たど)りよりて 真玉手(またまで)の 玉手(たまて)さし交(か)へ さ寝(ね)し夜(よ)の 幾許(いくだ)もあらねば 手束杖(たつかづえ) 腰(こし)にたがねて かければ 人に厭(いと)はえ かく行けば 人に憎(にく)まえ 老男(およし)は かくのみならし たまきはる 命惜(いのちを)しけど せむ術(すべ)も無し 【山上憶良(やまのうえのおくら) 巻五・八〇四】					
08	上村松篁	春愁	しゅんしゅう	92.0×65.0	1998年	春
	うらうらに 照れる春日(はるひ)に 雲雀(ひばり)あがり 情(こころ)悲(かな)しも 独りしおもへば 【大伴家持(おおとものやかもち) 巻十九・四二九二】					
09	杉松儀一	春霞	はるがすみ	162.1×130.3	1999年	春
	春の野に 霞(かすみ)たなびき うら悲(かな)し この夕(ゆふ)かげに 鶯(うぐひす)鳴(な)くも 【大伴家持(おおとものやかもち) 巻十九・四二九〇】					
10	中島千波	散りのまがひ	ちりのまがひ	162.1×112.1	1997年	春
	世間(よのなか)は 数(かず)なきものか 春花(はるはな)の 散(ちり)の乱(まが)ひに 死ぬべき思(おも)へば 【大伴家持(おおとものやかもち) 巻十七・三九六三】					

11	松村公嗣	花にほふ	はなにほふ	162.1×130.3	1999年	春
	見渡せば 向(むか)つ峰(を)の上(へ)の 花にほひ 照りて立てるは 愛(は)しき誰(た)が妻 【大伴家持(おおとものやかもち) 巻二十・四三九七】					
12	山下保子	桃苑	とうえん	145.5×112.1	1996年	春
	春の苑(その) 紅(くれなゐ)にほふ 桃の花 下(した)照(で)る道に 出で立つ少女(をとめ) 【大伴家持(おおとものやかもち) 巻十九・四一三九】					
13	那波多目功一	訪春	ほうしゅん	171.3×363.6	1997年	春
	正月(むつき)立ち 春の来(きた)らば かくしこそ 梅を招(を)きつつ 楽しきを経(へ)め 【紀卿(きのまえつきみ) 巻五・八一五】					
14	平岩洋彦	早蕨	さわらび	112.1×145.5	1996年	春
	石(いは)ばしる 垂水(たるみ)の上(うへ)の さ蕨(わらび)の 萌(も)え出づる春に なりにけるかも 【志貴皇子(しきのみこ) 巻八・一四一八】					
15	中野弘彦	吉野繚乱-時雨	よしのりょうらん-しぐれ	145.5×112.1	1997年	春
	やすみしし わご大君(おほきみ)の 高(たか)知(し)らす 吉野の宮は 畳(たたな)づく 青垣(あをかき)隠(ご)もり 川次(なみ)の 清き河内(かふち)そ 春べは 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る その山の いやますますに この川の 絶ゆること無く ももしきの 大宮人(おほみやびと)は 常(つね)に通(かよ)はむ 【山部赤人(やまべのあかひと) 巻六・九二三】					
16	川崎春彦	鳥の声	とりのこえ	112.1×162.1	1998年	春夏
	み吉野の 象山(きさやま)の際(ま)の 木末(こぬれ)には こだもさわく 鳥の声かも 【山部赤人(やまべのあかひと) 巻六・九二四】					
17	工藤甲人	炎立つ	かぎろいたつ	80.3×116.7	1997年	春
	東(ひむがし)の 野に炎(かぎろひ)の 立つ見えて かへり見すれば 月傾(かたぶ)きぬ 【柿本人麻呂(かきのもと)のひとまる) 巻一・四八】					
18	岡信孝	山川の瀬音	やまがわのせおと	116.7×80.3	1997年	春夏
	あしひきの 山川(やまがは)の瀬(せ)の 響(な)るなへに 弓月(ゆづき)が嶽(たけ)に 雲立ち渡る 【柿本人麻呂(かきのもと)のひとまる) 歌集歌 巻七・一〇八八】					
19	岡村倫行	蒲生野	がもうの	130.3×162.1	1996年	春夏
	あかねさす 紫(むらさき)野(の)行き 標野(しめの)行き 野守(のもり)は見ずや 君が袖振る 【額田王(ぬかたのおおきみ) 巻一・二〇】					
20	大矢紀	万葉花-はなかつみ	まんようか-はなかつみ	177.2×363.6	1996年	春夏
	をみなえし 佐紀沢(さきさは)に生(お)ふる 花かつみ かつても知らぬ 恋もするかも 【中臣女郎(なかとみのいらつめ) 巻四・六七五】					
21	荘司福	山吹の花	やまぶきのはな	90.9×116.7	1999年	春夏
	花咲きて 実(み)は成(な)らずとも 長き日(け)に 思ほゆるかも 山吹(やまぶき)の花 【作者未詳 巻十・一八】					
22	高山辰雄	弭の音	はずのおと	180.0×130.0	1997年	春夏
	やすみしし わご大君の 朝(あした)には とり撫でたまひ タ(ゆふへ)には い縁(よ)せ立たしし 御執(み)とらしの 梓(あづさ)の弓の 中弭(なかはず)の 音すなり 朝獵(あさかり)に 今立たすらし 暮獵(ゆふかり)に 今立たすらし 御執(み)とらしの 梓(あづさ)の弓の 中弭(なかはず)の 音すなり/たまきはる 宇智(うち)の大野(おほ)のに 馬並(な)めて 朝踏ますらむ その草深野(くさふかの) 【間人老(はしひとのおゆ) 巻一・三/四】					
23	大野俊明	清隅の	きよすみの	145.5×112.1	1996年	夏
	御佩(みはかし)を 劍の池の 蓮(はちす)葉(は)に 渟(たま)れる水の 行方(ゆくへ)無み わがする時に 逢ふべしと 逢ひたる君を な寝(いね)そと 母聞(きこ)せども わか情(こころ) 清隅(きよすみ)の池の 池の底 われは忍(しの)びず ただに逢ふまでに 【作者未詳 巻十三・三二八九】					
24	牧進	薄暮	うすぐれ	116.7×80.3	1998年	夏
	わか屋戸(やど)の 夕影草(ゆふかげくさ)の 白露(しらつゆ)の 消(け)ぬがにもとな 思(おも)ほゆるかも 【笠郎女(かさのいらつめ) 巻四・五九四】					
25	清水操	立夏	りっか	145.5×97.0	1997年	夏
	春過ぎて 夏来(きた)るらし 白袴(しろたへ)の 衣乾(ほ)したり 天(あめ)の香具山 【持統天皇(じとうてんのう) 巻一・二八】					



第2章 【秋・冬】

26	奥田元宋	明日香川夕照	あすかがわせきしょう	116.7×90.9	1996年	秋
	明日香(あすか)川 黄葉(もみちば)流る 葛城(かづらき)の 山の木(こ)の葉は 今し散るらむ 【作者未詳 卷十・二二〇】 / あしひきの 山の黄葉(もみちば) 今夜(こよひ)もか 浮かびゆくらむ 山川(やまがは)の瀬に 【大伴書持(おおとものふみもち) 卷八・一五八七】					
27	安野光雅	檜隈	ひのくま	72.7×116.7	1999年	秋
	さ檜(ひ)の隈(くま) 檜隈川(ひのくまがは)の 瀬を早み 君が手取らば 言寄(ことよ)せむかも 【作者未詳 卷七・一一〇九】					
28	木下育應	野路爽晨	のじそうしん	80.3×116.7	1997年	秋
	手に取れば 袖(そで)さへにほふ 女郎花(をみなへし) この白露(しらつゆ)に 散らまく惜(を)しも 【作者未詳 卷十・二一一五】					
29	絹谷幸二	大和国原	やまとくにはら	130.3×162.1	1997年	秋
	大和(やまと)には 群山(むらやま)あれど とりよるふ 天(あめ)の香具山(かぐやま) 登り立ち 国見(くにみ)をすれば 国原(くにはら)は 煙(けぶり)立ち立つ 海原(うなばら)は 鷗(かまめ)立つ立つ うまし国ぞ 蜻蛉島(あきづしま) 大和の国は 【舒明天皇(じよめいてんのう) 卷一・二】					
30	久保嶺爾	神の池	かみのいけ	129.8×129.8	1998年	秋
	大君(おほきみ)は 神にし坐(ま)せば 水鳥(みづとり)の すだく水沼(みぬま)を 都(みやこ)となしつ 【作者不詳 卷十九・四二六一】					
31	三谷青子	鹿	しか	116.7×116.7	1997年	秋
	たされば 小倉(をぐら)の山に 鳴く鹿は 今夜(こよひ)は鳴かず い寝(ね)にけらしも 【岡本天皇(おかもとてんのう) 卷八・一五一一】					
32	渡辺洋子	葦辺夕照	あしべせきしょう	145.5×97.0	1998年	秋
	葦辺(あしへ)行く 鴨の羽(は)がひに 霜降りて 寒き夕へは 大和し思ほゆ 【志貴皇子(しきのみこ) 卷一・六四】					
33	林潤一	秋風	あきかぜ	121.3×182.1	1998年	秋
	真葛(まக்குず)原 なびく秋風 吹くごとに 阿太(あだ)の大野の 萩(はぎ)の花散る 【作者未詳 卷十・二〇九六】					
34	田淵俊夫	はぎの頃	はぎのころ	145.5×112.1	1998年	秋
	明日香川(あすかがは) 行(ゆ)き廻(み)る丘(をか)の 秋萩(あきはぎ)は 今日降る雨に 散りか過ぎなむ 【丹比国人(たじひのくにひと) 卷八・一五五七】					
35	今井珠泉	牡鹿啼く	おしかなく	97.0×145.5	1997年	秋
	秋萩(あきはぎ)の 散りのまがひに 呼び立てて 鳴くなる鹿の 声の遥(はる)けさ 【湯原王(ゆはらのおおきみ) 卷八・一五五〇】					
36	吉村誠司	秋野	あきの	116.9×80.5	1999年	秋
	夕月夜(ゆふづくよ) 心もしのに 白露の 置くこの庭に 蟋蟀(こほろぎ)鳴くも 【湯原王(ゆはらのおおきみ) 卷八・一五五二】					
37	岡橋萬帆	飛鳥浄御原懐古	あすかきよみはらかいこ	145.5×97.0	1999年	秋
	大君(おほきみ)は 神にし坐(ま)せば 赤駒の 匍匐(はらば)ふ田井(たみ)を 都(みやこ)となしつ 【大伴御行(おおとものみゆき) 卷十九・四二六〇】					
38	森田りえ子	撫子	なでしこ	180.0×190.0	1999年	秋
	石竹花(なでしこ)が 花見るごとに 少女(をとめ)らが 笑(ゑ)まひのほひ 思ほゆるかも 【大伴家持(おおとものやかもち) 卷十八・四一一四】					
39	上村淳之	佐保の詩	さほのうた	171.2×363.6	1998年	秋
	千鳥(ちどり)鳴く 佐保(さほ)の河瀬(かはせ)の さざれ波 止(や)む時も無し わが恋ふらくは 【大伴坂上郎女(おおとものさかのうえのいらつめ) 卷四・五二六】					
40	西田俊英	秋山迷ひぬる	あきやままとひぬる	145.5×112.1	1998年	秋
	秋山の 黄葉(もみち)を茂(しげ)み 迷(まと)ひぬる 妹(いも)を求めぬ 山道(やまぢ)知らずも 【柿本人麻呂(かきのものひとまる) 卷二・二〇八】					
41	平松礼二	路-湖愁	みち-こしゅう	112.1×162.1	1997年	秋
	ささなみの 志賀(しげ)の辛崎(からさき) 幸(さき)くあれど 大宮人(びと)の 船待ちかねつ 【柿本人麻呂(かきのものひとまる) 卷一・三〇】					
42	吉澤照子	いちし		90.9×116.7	1998年	秋
	路の辺(へ)の 寺師(いちし)の花の いちしろく 人皆知りぬ 我が恋妻(こひづま)を 【柿本人麻呂(かきのものひとまる) 歌集歌 卷十一・二四八〇】					

43	村井玉峰	明日香晨雪	あすかしんせつ	145.5×112.1	1999年	冬
	矢釣(やつり)山 木立(こだち)も見えず 降(ふ)りまがふ 雪のさわる 朝(あした) 楽(たの)しも 【柿本人麻呂(かきのもと)のひとまる) 歌集歌 卷三・二六二】					
44	加山又造	月と秋草	つきとあきくさ	160.4×314.8	1996年	秋
	秋の野に 咲きたる花を 指(および)折り かき数ふれば 七種(ななくさ)の花/萩(はぎ)の花 尾花(をばな) 葛花(くずはな) 瞿麦(なでしこ)の花 女郎花(をみなえし) また藤袴(ふちばかま) 朝貌(あさがほ)の花 【山上憶良(やまのうえのおくら) 卷八・一五三七/一五三八】					
45	平山郁夫	額田王	ぬかたのおおきみ	116.7×80.3	1997年	秋
	君待つと わが恋ひをれば わが屋戸(やど)の すだれ動かし 秋の風吹く 【額田王(ぬかたのおおきみ) 卷四・四八八】					
46	三輪晃久	三輪山をしかも隠すか	みわやまをしかもかくすか	112.1×145.5	1996年	?
	味酒(うまさけ) 三輪(みわ)の山 あをによし 奈良の山の 山の際(ま)に い隠(かく)るまで 道の隈(くま) い積(つも)るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放(みさ)けむ山を 情(こころ)なく 雲の 隠(かく)さふべしや 三輪山を しかも隠すか 雲だにも 情(こころ)あらなむ 隠さふべしや 【額田王(ぬかたのおおきみ) 卷一・一七/一八】					
47	井上稔	斑鳩夕景	いかるがゆうけい	97.0×130.3	1996年	秋冬
	斑鳩(いかるが)の 因可(よるか)の池の 宜(よろ)しくも 君を言はねば 思ひそわがする 【作者未詳 卷十二・三〇二〇】					
48	岸野圭作	いはしろ	いはしろ	112.1×145.5	1996年	秋冬
	磐代(いはしろ)の 浜松が枝(え)を 引き結び 真幸(まさき)くあらば また還り見む 【有間皇子(ありまのみこ) 卷二・一四一】					
49	松尾敏男	鶴鳴きわたる	たづなきわたる	171.3×363.6	1996年	冬
	若の浦に 潮満ち来れば 渦(かた)を無み 葦辺(あしへ)をさして 鶴(たづ)鳴き渡る 【山部赤人(やまべのあかひと) 卷六・九一九】					
50	手塚雄二	月読	つくよみ	104.8×116.7	1999年	?
	海原(うなはら)の 道遠みかも 月読(つくよみ)の 光すくなき 夜は更(ふ)けにつつ 【作者未詳 卷七・一〇七五】					
51	浜田泰介	月と三山	つきとさんざん	85.0×163.0	1999年	秋冬
	香具山(かぐやま)は 畝火(うねび)ををしと 耳梨(みみなし)と 相(あひ)あらしひき 神代(かみよ)より かくにあるらし 古昔(いにしへ)も 然(しか)にあれこそ うつせみも 孀(つま)を あらしふらしき 【天智天皇(てんちてんのう) 卷一・一三】					
52	市原義之	霧想	むそう	112.1×145.5	1997年	冬
	明日香(あすか)河 川淀(かはよど)さらず 立つ霧(きり)の 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに 【山部赤人(やまべのあかひと) 卷三・三二五】					
53	片岡球子	富士	ふじ	116.8×80.3	1998年	冬
	田児の浦ゆ うち出(い)でて見れば 真白(ましろ)にそ 不尽(ふじ)の高嶺(たかね)に 雪は降りける 【山部赤人(やまべのあかひと) 卷三・三一八】					
54	北野治男	霧の立つ	きりのたつ	145.5×89.4	1999年	冬
	君が行く 海辺(うみへ)の宿に 霧立たば 吾(あ)が立ち嘆く 息(いき)と知らせ 【作者未詳 卷十五・三五八〇】					
55	千住博	ウォーターフォール		130.3×162.1	1999年	冬
	嘆(なげ)きせば 人知りぬべみ 山川(やまがは)の 激(たぎ)つ情(こころ)を 塞(せ)かへてあるかも 【作者未詳 卷七・一三三三】					
56	福王寺法林	月明り	つきあかり	92.0×117.5	1998年	冬(春に近い冬)
	ひさかたの 月夜(つくよ)を清(きよ)み 梅の花 心開けて わが思(も)へる君 【紀少鹿女郎(きのおしかのいらつめ) 卷八・一六六一】					

※出品作品の所蔵は、すべて奈良県立万葉文化館です